
妖精の死をぼくは見た

naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の死をぼくは見た

【Nコード】

N8948B

【作者名】

naoki

【あらすじ】

壮介の妹・結衣は不思議な女の子。眼は見えないのに、彼女には普通のひとには見えないものが見えていた。

（前書き）

*死にネタ（登場人物が作中で死亡する話）です。ご注意ください。

「しんじやった」

彼女が泣いた。泣いてそう呟いた。だから僕には解ったんだ。

僕が潰してしまったものは、彼女のたったひとつのものだったのに。

結衣^{ゆい}は不思議な女の子だった。誰も彼女の言うことを信じようとはしなかったけれど。ただ壮介だけは妹が不思議だと知っていて、それを認めていたのだ。

恐らくは生まれたときから、結衣には見えない何かが見えていた。けれど彼女の瞳はまた、何の光も得てはいなかった。瞼を持ち上げても意味のない瞳。だからこそ、誰も彼女の言葉を信じなかったのだと思う。

視力と同じように、彼女の体はいたるところが壊れていた。壮介には医学的なことはわからないけれど、寝たきりの結衣が長く生きられないことだけは聞き知っていた。

眠っている結衣の傍らに膝をつくと、いつでも結衣は眼を覚ました。ほんの少し身じろぎするから、眼を閉じていてもそれが判るのだ。

「壮はやさしいね」

ベッド脇の植木鉢に水をやっていると、可愛らしい口元をゆるめて結衣が言う。十をやっとすぎたばかりの妹は、生意気にも兄を「

「壮」と呼ぶ。別に構わないと笑って許すと、微笑んだ結衣は「壮はやさしい」と言ったのだ。以来、そのように呼ばせている。

「花がよろこんでる。壮がやさしくしてくれるから」

「へえ？ 僕には解らないけど」

苦笑しながら言うと、身じろいだ結衣は見上げるように顔を向けてきた。

「わらってるのよ。壮がさわってくれるから。花がよろこんでわらってる」

結衣は、生まれてから一度も花を見たことがない。けれど彼女には、花がきれいな少女のように見えるという。

それが結衣の不思議。壮介だけが認めている、彼女のたったひとつの視界だ。

花だけではない。風も水も、彼女には何かに見えているらしかった。だから、時々こんなことを言う。

両親は信じてはいない。結衣が同じ事を両親のいる前で言うと、二人は結衣を哀れんで泣く。死期の近い娘が、幻覚か何かを見ていると思っっているのだろうか。

だから結衣のことを本当に知っていると見えるのは、壮介だけだったのだ。

結衣のベッド脇と、それから窓際には植木鉢が並んでいた。結衣には他に友だちがいなかったから。少女のような姿をした花たちは、結衣に話しかけたり微笑んでくれたりするのだという。結衣が嬉し

そつにそう言うから、自然と壮介は植木鉢の数を増やしていった。世話をするのも壮介の仕事だ。

ゼラニウムに水をやっていたとき、ふと結衣が呟いた。

「…げんきないね」

「ん？」

「そのこ」

こまっとな、と結衣が言う。瞳はやはり固く閉じられたままだ。

横たわる妹を振り返って、それから改めてゼラニウムを見直した壮介は首を傾げた。元気がないとは、ゼラニウムのことだろうか。

「別に、いつもと変わらないように見えるよ」

「…」

結衣は答えなかった。ゼラニウムは青々と葉っぱを繁らせている。壮介には妹の顔色の方がよほど元気がないように見えた。近頃結衣は前にも増して痩せてきている。誰に聞いても、何がいけないのか解らなかったから、壮介にも成す術はない。

結衣の言葉の意味と衰弱の原因を知ったのは、結局彼女が死んだ朝だった。

結衣が亡くなったのは、空気の冷たい朝だった。眼を覚ましていちばんに結衣の部屋に行き、水遣りを日課にしていた壮介がそれを見取った。

とつくに起きていたらしい結衣が、ゼラニウムに手を伸ばしているのを壮介は見た。

「なにして…る、の」

その光景の異様さに思わず舌がもつれそうになる。ベッドから伸びている、もともと細い結衣の腕が、見る間にやせ衰えていくのだ。まるでなにかに命を吸われていくように。

そう思った瞬間、弾かれたように壮介は足を踏み出していた。窓辺に並んだ植木鉢から、正確にただひとつを突き落とすのは簡単だった。駆け寄って叩き落した瞬間は何も考えられなくて、道路に当たって砕けた音が聴こえてから、ようやく自分が何をしたのを知った。

きゅつと心臓が縮み上がる音が聴こえるようだった。とてつもない罪悪感が押し寄せてきて、けれどそれ以上の恐怖に壮介は勝てなかったのだ。

恐る恐る振り返ると、結衣の顔色は死にいく人のそれだった。

「…しんじやった」

まっしろい顔を見つめていると、妹はやつとの力で唇を動かした。絶望と哀れみと愛しさと、全部ないまぜになった声だ。その全てが、砕け散ったゼラニウムに向けられたものだった。

「しんじやった」

ぱたりと腕をシーツに落として言う。震える瞼が涙を押し出して、ほんとうに慎ましかに彼女は泣いた。最期の涙でさえ、消え入るように儚かった。

「…結衣…」

「しんじやったよう…」

呟くような声で彼女が泣くから。だから壮介にはやっとそれが解ったのだ。

彼女は自分の命を与えていたのだ。結衣が見ることの出来る、たったひとつのものたちに。それが彼女のほんとうの不思議。きっとそれが、それだけが、結衣の生きる意味だった。

そんなことは結衣は言わなかったけれど、きっとそうだろうと壮介は思った。

「結衣…結衣。結衣」

手を握って名を呼ぶと、力なく握り返してきて、それが結衣の最後のことだった。

「…結衣。ごめんね、結衣」

ごめんね、と言ったけれど、きっともう聞いてはいない。

そう思っただけにかなしくなつて、壮介は小さすぎる掌を額に押し付けて泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8948b/>

妖精の死をぼくは見た

2010年10月13日03時22分発行